

平成27年度「JA青年組織手づくり看板全国コンクール」審査講評

全国農協青年組織協議会が主催する平成27年度「JA青年組織手づくり看板全国コンクール」には、全国32都道府県から78作品（看板部門67点、アート部門11点）の応募があり、平成28年1月20日（水）に東京・大手町のJAビルで審査委員会を開催しました。作品募集テーマは昨年同様「農業のある地域づくりの大切さに関する地域住民へのアピール」とし、インパクト（設置場所選択を含む）、内容、デザインなどの審査基準に基づき審査を行いました。

なお、審査委員は、全国消費者団体連絡会、JA全農、JA共済連、農林中央金庫、日本農業新聞、家の光協会、農協観光、JA全中の各団体からお集まりいただいた広報担当の職員など8名の委員で審査を行い、審査委員長は互選により、全国各地の青年部活動を記事として取り上げていただいている日本農業新聞の広報局局長である遠藤益功氏が選ばれました。

審査の結果、最優秀賞には「JA東京あおば青壮年組織協議会（東京都）」の作品が選ばれました。現代の時代設定を浮世絵風に表現した独創的なデザインが目を引くこの作品は、東京で伝統的に栽培されてきた江戸東京野菜をユニークに表現し、またシンプルな文字や構図が看板としての見やすさを演出しており、総合的に突出した評価を受けました。また、看板が周囲を住宅に囲まれた圃場に設置されており、地域住民が都市農業の重要性・必要性を考えるきっかけとなることが「農業のある地域づくりの大切さを地域住民にアピールする」という本コンクールのテーマと合致することから、最優秀賞に相応しい作品と多くの審査委員から評されました。

アート部門賞には「JA道東あさひ青年部 根室支部（北海道）」の作品が選ばれました。牧草ロールパックが一つひとつ積み上がって作り上げられているこの作品は協同組合の精神に通じたものであると評価されました。また、広大な土地に巨大なアートを設置することで、日本の食料基地である北海道農業の雄大さが表現されている他、一目でメッセージが伝わってくるイラストのわかりやすさも評価され、アート部門賞に相応しい作品として多くの審査委員から評価を受けました。

（各特別賞について）

○ 全国消費者団体連絡会賞「今金町農協青年部（北海道）」

黒毛和牛とホルスタイン牛の衝突で若者の荒々しさを表現した作品で、全国消費者団体連絡会の小倉氏は「農業現場の厳しさをストレートに伝えている」とそのインパクトを評しました。特産の男爵芋を中心に配置することで地域の特産物をアピールする構図も評価されました。

○ J A全農賞「J A鳥取中央青壮年部 東伯支部（鳥取県）」

手づくり感あふれるデザインが印象的であるとともに、母親に「農（ノ）ベル賞」を捧げるという創意あふれる言葉の表現が評価されました。審査委員からは「J Aグループとして全国展開したいキャッチフレーズだ」との声が寄せられ、そのメッセージ力に高い評価が集まりました。

○ J A共済連賞「花巻農業協同組合青年部 石鳥谷支部（岩手県）」

地域の農業とそれを取り巻く暮らしの様々な場面を切り取って表現した作品で、青年部盟友が中心になって地域社会を支えている姿に共感の声が寄せられました。食育や婚活などの取り組みを通じて、地域社会に対する盟友の誇りと覚悟が感じられる作品と評されました。

○ 農林中央金庫賞「J Aさが白石地区青年部 須古支部（佐賀県）」

地元で収穫される農産物を全体にデザインされた作品で、それぞれが色鮮やかに表現されており、地域の特産物をアピールしていく思いが今回のテーマである「農業のある地域づくり」と合致している点が評価されました。

○ 日本農業新聞賞「飛騨農協青年部大野地区 清見支部（岐阜県）」

アニメのセル画のようなデザインが若い人への訴求効果を期待させる作品として評価されました。農村ではあまり見られないようなポップでかわいらしい看板が、農業に関する幅広い層からの関心を引き起こす作品であると評されました。

○ 地上賞「岩手ふるさと農業協同組合 水沢地域青年部（岩手県）」

子どもがおいしそうにおにぎりを食べている様子が非常に印象的な作品であり、イラストの手づくり感による親しみやすさの演出が評価されました。大きな文字が視認性を高めるとともに、地元産米の消費を見直すきっかけになることが評価されました。

○ 農協観光賞「J Aテラル越前青壮年部連絡協議会 上庄地区（福井県）」

全体の構図や色使いによる看板のインパクトが印象的な作品であり、「作ろう！！」という言葉に、地元の特産物を通じて地域を盛り上げようとする盟友の強い思いが感じられる点が評価されました。

○ J A全中賞「J A菊池青壮年部 菊陽支部（熊本県）」

農地の治水・浄水機能によって人々の生命や暮らしが支えられていることが一目で伝わる作品であり、農を営む生活が地域住民の食料と暮らしを支えていることについて子どもにもわかるようなデザインであることが評価されました。

(総評)

今回のコンクールに寄せられた作品も、その一つ一つが個性的で、それぞれの地域農業や暮らしを踏まえて制作されていました。毎年、デザインのレベルが高くなっており、また絵のタッチや色使いも訴求効果を高めるような工夫が凝らされているなど、各々の作品から盟友の熱い思いがしっかりと伝わってきました。

昨年に続き本年度もデザインに秀でた作品が多く、作品を制作するにあたっては、優良事例を研究し思いが明瞭に伝わるような工夫をしていることが見て取れました。今回の受賞作品を振り返ると、地域の現状を踏まえて青年部員同士で意見を交わし、何を訴えるべきかを明確にすることに加え、その思いを的確に訴えるためのデザインを工夫して訴求効果を高めた作品が評価を受けていました。

メッセージ(標語)に関しては、訴求効果を高めるために作成した独自の造語やシンプルな表現を用いた作品が比較的高い評価を受けており、文字は見る側が見やすいような大きさと配置を心がけると良いかと思います。

審査では、看板部門・アート部門にかかわらず、テーマである「農業のある地域づくり」を実現するために「どうメッセージを伝えているか」という点が最大の評価ポイントとなりました。その基準には、広く地域住民が目にするような場所に設置されていることが一つ挙げられます。今回の審査では同じ場所に複数の看板が掲載されているように見受けられる作品があり、設置にあたっては工夫を凝らすよう審査委員から意見が出ました。

その他、地域の特徴をしっかりと表現しているか、インパクトのあるデザインかどうかなどが受賞の決め手となりました。

今回応募された作品が、地域住民に食と農業への理解を深めてもらうきっかけとなり、作品の作成と活用にあたっては地域住民を巻き込む取り組みが広がっていくことを期待しております。多くの盟友が関わるができる看板制作というイベントを通じて、ますます青年部の結集が強まることを信じております。

今後も本コンクールの開催が看板制作の励みになること、そして青年部の看板・アート作品が全国各地に広がり、日本農業・地域社会の情報発信源となることと確信しています。

【審査委員】(敬称略)

遠藤 益 功<審査委員長>(日本農業新聞・広報局 局長)、小倉 寿子(全国消費者団体連絡会・政策スタッフ)、久保田 治己(全国農業協同組合連合会・広報部 部長)、細川 雅史(全国共済農業協同組合連合会・制度調査部事業広報G 課長)、木村 吉 弥(農林中央金庫・総合企画部 広報担当部長)、山本 樹(家の光協会・編集本部地上編集部 編集長)、香川 晋二(農協観光・旅行事業部営業企画課 課長)、樋口 直 樹(全国農業協同組合中央会・広報部 部長)